

## 事業終了報告 概要表 (1頁以内)

プログラム名	ミャンマー避難民人道支援プログラム (緊急対応期)				
事業名	バングラデシュ・コックスバザール県ミャンマー避難民に対する水衛生環境改善事業				
開始日	2018年9月10日	終了日	2019年12月31日	日数	478日間
団体名	認定NPO法人IVY		担当者名	安達 三千代	

事業目的	キャンプ住民とホストコミュニティの住民の水とトイレへのアクセスを向上させ、住環境を整える。衛生関連サービスの提供により、水因性疾病の防止を促す。	
事業の成果 (概要)	本事業では、クトゥパロン難民キャンプの2つのキャンプとホストコミュニティにおいて、1) 深井戸掘削と浄化槽付トイレの設置を通じ、安全な水とトイレへのアクセス改善に貢献した。また、2) これらの設備を利用する住民や清掃ボランティアへの衛生に対する意識啓発、維持管理の強化を通じ、コミュニティ挙げての水因性疾病の防止の取り組みに貢献した。	
	成果の達成度とそこから得た学び	裨益者 (誰が、何人)
	<p><u>1. 難民キャンプにおける深井戸掘削及び水衛生関連サービスの提供</u></p> <p>キャンプ19に20基、キャンプ8Wに1基、計21基の深井戸掘削を行い、21本全てで大腸菌がない安全な水を掘り当てることができた。その結果、井戸から家までの距離、給水所での待ち時間が短縮され、1人1日平均28.2Lの水が使用できるようになるなど、6,739人の安全な水へのアクセス向上を達成した。また、水衛生関連サービス(水衛生トレーニング、衛生キットの配布、井戸の清掃ボランティアへの清掃トレーニング、清掃キットの配布)により、住民の衛生行動が改善され、清掃ボランティアによって井戸が清潔に管理されているなど、飲み水を原因とする下痢等のリスクを大幅に減らすことができた。</p> <p>一方、事業運営上では、井戸掘削場所の決定には、データに頼るだけでなく、直近の情報が集まるCiCやキャンプのWASHフォーカルからも他団体の動向等の最新情報収集を行っておくことが必須であることを学んだ。</p>	避難民 6,739人 (女性 3,496人、男性 3,243人)
	<p><u>2. 難民キャンプにおける衛生トイレ建設及びトイレ関連サービスの提供</u></p> <p>キャンプ19に90基、キャンプ13に10基、計100基のトイレを設置した。トイレは男女別々の建物で、1基2室、扉は鍵付きで、5,650リットルの浄化槽を1つずつ備えている。その結果、1つのトイレを利用する人数は平均12.8人、家からの距離も9.9メートルと短縮され、2,567人の衛生的なトイレへのアクセス向上を達成した。また、トイレ関連サービス(トイレの利用に関するトレーニング、衛生キットの配布、トイレの清掃ボランティアへの清掃トレーニング、清掃キットの配布)により、感染症予防の観点からトイレ利用の重要性、手洗い習慣が身につくなど住民の衛生意識が向上したことや、清掃ボランティアによるトイレの衛生状態の保持等から、排泄が原因となる水因性の下痢の防止を促すことができた。</p>	避難民 2,567人 (女性 1,409人、男性 1,158人)

<p>一方、キャンプ13で追加のトイレを建設中、NGO局からの通達で難民キャンプ内での活動が突然中止となった<sup>1</sup>。トラブルの兆候に日ごろから注意を払うこと、事態の収束に向け、対相手国政府への交渉は早期に大使館の協力を仰ぐべきだった。</p>	
<p><u>3. ホストコミュニティにおける深井戸掘削及び水衛生関連サービスの提供</u></p> <p>ウキヤ郡2村に22基の深井戸掘削を行い、22基全てで大腸菌がない安全な水を掘り当てることができた。その結果、井戸から各家までの距離や給水所での待ち時間を短縮、1人1日平均28.7Lの水が使用できるようになるなど難民キャンプの影響で井戸が渇水した問題を改善でき、1,860人の安全な水へのアクセス向上を達成した。また、水衛生関連サービス（水衛生トレーニング、衛生キットの配布、井戸の清掃ボランティアへの清掃トレーニング、清掃キットの配布）により、住民の衛生行動が改善、清掃ボランティアによって井戸が清潔に管理されるなど、飲み水が原因の下痢等のリスクを減らすことができた。</p> <p>難民キャンプと同様にアクアタブの配布も予定していたが、排泄場所がキャンプと違い住居から離れた屋外であることからアクアタブのニーズが低く、石鹸のみの配布となった。生活環境の違いに着目したニーズ調査が必要なことを学んだ。</p>	<p>ホスト1,860人（女性910人、男性950人）</p>

<sup>1</sup> 2019年8月下旬に、難民の帰還延期が決定されたことを受け、様々な不便を強いられている地元住民の難民への反感が益々高まっていた最中に、地元の議員が難民によって殺されるという事件が起きた。おりしも現地提携団体のムクティは生計向上事業でテクナフ郡の住民に配布するため、「草刈り鎌」2,600個を地元業者に発注し、26日にメディア2誌がこの件を難民の帰還中止を望む支援団体が「武器」を彼らに配ろうとしていたと報道し、28日NGO局は当事業を含む6事業の活動停止を通達した。その後、3か月間、活動停止解除に向け、現地日本大使館を通じて当局へ申し入れしていただいたが、11月27日に「今月末までに活動を完全に中止する旨」の文書が届いたため、トイレ30基の工事中止に追い込まれた。

事業の成果

事業全体としての成果		本事業では、クトゥパロン難民キャンプの2つのキャンプとホストコミュニティにおいて、1) 深井戸掘削と浄化槽付トイレの設置を通じ、安全な水とトイレへのアクセス改善に貢献した。また、2) これらの設備を利用する住民や清掃ボランティアへの衛生に対する意識啓発、維持管理の強化を通じ、コミュニティ挙げての水因性疾病の防止の取り組みに貢献した。				
事業開始前の状況	事業開始時に目指した個別の成果	目標値（成果を図る指標）と確認方法	事業実施後の実績（事業開始時に立てた目標値に対する実績）	実施された活動（具体的に記載）	事業実施後の個別の成果および副次的効果	<input type="checkbox"/> 正の外部要因 <input type="checkbox"/> 負の外部要因
クトゥパロン難民キャンプでは難民の数に対して井戸の数がスフィアやWASHクラスターの基準を下回っている。ヘルスクラスターの22週間による調査では、2018年に入り毎週4,000ケース以上の水因性による下痢が報告されている。生活環境が劣悪だけでなく、衛生知識が少な	1-1 約 10,000人が、1年を通して安全な水にアクセスが出来る。  1-2 住民の衛生意識が向上し適切な衛生行動が促される。	1-1 ・井戸から汲み上げた100mlあたりの水に、大腸菌がないことが水質検査で確認される。 ・1人1日あたり10-15リットルの水を使用できる。 ・井戸の給水所での待ち時間は最大で30分間となる。 ・井戸から各家までの距離は200メートル以内となる。 ・同じ井戸を使用する人数は最大で500人となる。 1-2 720フィートの深さの乾季に枯れない深井戸が20基建設され、コックス県に引き渡される。 1-3 2,000世帯に対し、ファシリテーターによる水衛生トレー	1-1. ・井戸から汲み上げた100mlあたりの水全てで大腸菌がないことが水質検査で確認された。 ・1人1日あたり平均して28.2リットルの水を使用できるようになった。 ・井戸の給水所での待ち時間は、最大で15分（平均約4.3分）となった。 ・井戸から各家までの距離は最大30メートルとなった。 ・同じ井戸を使用する人数は最大で417人（平均321人）となった。 1-2. 640～720フィートの深さの乾季に枯れない深井戸が21基建設され、CiCに引き渡され	1-1. 現地提携団体ムクティ・コックスバザール（以下ムクティ）との協議・MoUの締結、WASHクラスターミーティング・キャンプWASHコーディネーションミーティング・キャンプサイトマネジメントチームとの調整、CiCによる活動承認取得 1-2. アセスメントの実施 1-3. 水衛生トレーニングの実施 1-4 清掃トレーニングの実施 1-5 井戸掘削と掘削工事のモニタリング、水質検査の実施 1-6 譲渡・贈呈 1-7 掘削後のモニタリング及び管理と修理の実施 1-8 衛生キットの追加配布の実施	<成果> ・深井戸を設置したことで、6,739人のキャンプ住民の水へのアクセスが向上した。 ・トレーニングによって、排泄後や調理前に手洗いをするようになった。 ・調理器具を使用後に洗浄するようになった。 ・水を飲む前に煮沸またはアクアタブを使用するようになった。 ・水を保管する時に蓋を使用するようになった。  <副次的成果> 特になし	<input type="checkbox"/> FD7申請後、10日で承認されたため、事業を計画通りに開始することができた。 <input type="checkbox"/> 井戸建設が乾期に行われたため、モンスーン・サイクロンの影響を受けなかった。

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

<p>いたため、適切な衛生行動を取れていないことも大きいと考えられている。</p>		<p>ニングが開催される。 1-4 2,000 世帯のうちの 6 割が継続的に衛生キットを受領する。 1-5 20 名の清掃ボランティアが清掃キットを受領する。 <u>確認方法</u> 1-1-水質検査報告書、モニタリング報告書 1-2 施工業者からの完了報告書、コックスバザール県の受領書 1-3 出席簿 1-4 受領書</p>	<p>た。 1-3. 1,499 世帯に対し、ファシリテーターによる水衛生トレーニングが開催された。 1-4. 衛生トレーニングを受講した 1,499 世帯のうちの 94%にあたる 1,406 世帯が3回にわたって継続して衛生キットを受領した。 1-5. 21 名の清掃ボランティアが清掃キットを受領した。</p>			
<p>クトゥパロン難民キャンプでは避難民の数に対して井戸の数がスフィアや WASH クラスターの基準を下回っている。ヘルスクラスターの 22 週間による調査では、2018 年に入り毎週 4,000 ケース以上の水因性に</p>	<p>2-1 約 3,600 人が衛生トイレにアクセスが出来る。  2-2 住民の衛生意識が向上し適切な衛生行動が促される。</p>	<p>2-1 ・鍵付きの男女別衛生トイレが 90 基建設され、コックスバザール県に引き渡される。 ・同じトイレを使用する人数は最大で 20 人となる。 ・トイレから各家までの距離は 50 メートル以内となる。 2-2 720 世帯に対しファシリテーターによるトイレ利用に関するトレーニングが開催される。 2-3 720 世帯のうちの 6 割が継続的に衛生キッ</p>	<p>2-1. ・鍵付きの男女別衛生トイレが 100 基建設され、CiC に引き渡された。 ・同じトイレを使用する人数は最大 20 人（平均 12.8 人）となった。 ・トイレから各家までの距離は最大 40 メートル（平均して 9.9 メートル）となった。 2-2. 607 世帯に対しファシリテーターによるトイレ利用に関するトレーニングが開催された。 2-3. トイレ利用に関す</p>	<p>2-1 ムクティとの協議・MoU の締結/WASH クラスターミーティング・キャンプ WASH コーディネーションミーティング・キャンプサイトマネージメントチームとの調整、CiC による活動承認取得 2-2 アセスメントの実施 2-3 トイレ利用に関するトレーニングの実施 2-4 清掃トレーニングの実施 2-5 衛生トイレ建設と建設工事のモニタリングの実施 2-6 譲渡・贈呈 2-7 モニタリングの実施</p>	<p>&lt;成果&gt; ・避難民 2,567 人のトイレへのアクセスが向上した。 ・排泄後や調理前に手洗いをするようになった。 ・調理器具を使用後に洗浄するようになった。  &lt;副次的成果&gt; 特になし</p>	<p>□ FD7 申請後、10 日で承認されたため、事業を計画通りに開始することができた。 □ バングラデシュ政府より 11 月末日で事業を中止するよう通達 came ため、トイレ建設を中止せざるを得なくなった。 □ 衛生トイレ建設が乾期に行われたため、モンスーン・サイクロン</p>

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

<p>よる下痢が報告されている。生活環境が劣悪だけでなく、衛生知識が少ないため、適切な衛生行動を取れていないことも大きいと考えられている。</p>		<p>トを受領する。 2-4 90名の清掃ボランティアが清掃キットを受領する。 2-5 浄化槽の充足率が80%超えた場合には、2週間以内に汲み取りが行われる。 <u>確認方法</u> 2-1 施工業者からの完了報告書、コックスバザール県の受領書、モニタリング報告書 2-2 出席簿 2-3 住民の受領書 2-4 清掃ボランティアの受領証 2-5 モニタリング報告書</p>	<p>るトレーニングを受講した607世帯のうちの99.7%にあたる605世帯が3回にわたって継続して衛生キットを受領した。 2-4.90名の清掃ボランティアが清掃キットを受領した。 2-5.浄化槽の充足率が80%超えた場合の2週間以内の汲み取りは実施できなかった。(下記p13の注釈5参照)</p>	<p>2-8 修理・汲み取りの実施 2-9 衛生キットの追加配布の実施</p>		<p>の影響を受けなかった。</p>
<p>キャンプの井戸の影響で、村の地下水水位が低下し、井戸が枯渇しており、十分な生活用水を確保できない。生活環境が劣悪だけでなく、衛生知識が少な</p>	<p>3-1 約2,500人が1年を通して安全な水にアクセス出来る。  3-2 住民の衛生に対する意識が向上し適切な衛生行動が促される。</p>	<p>3-1 ・井戸から汲み上げた100mlあたりの水に、大腸菌がないことが水質検査で確認される。 ・1日あたり10~15リットルの水を使用できる。 ・井戸の給水所での待ち時間は最大で30分間となる。 ・井戸から各家までの距離は200メートル以</p>	<p>3-1 ・井戸から汲み上げた100mlあたりの全ての水に、大腸菌がないことが水質検査で確認された。  ・1人1日あたり平均して28.7リットルの水を使用できるようになった。  ・井戸の給水所での待ち時間はなくなった。</p>	<p>3-1 ウキヤ郡地方政府・ウキヤ郡水衛生局、パロンカリユニオン<sup>2</sup>との協議、ウキヤ郡地方政府代表による活動承認取得 3-2 アセスメントの実施 3-3 水衛生トレーニングの実施 3-4 清掃トレーニングの実施 3-5 井戸掘削と掘削工事のモニタリング、水質検査の実施</p>	<p>&lt;成果&gt; ・深井戸を設置したことで、1,860人のホストコミュニティ住民の水へのアクセスが向上した。 ・排泄後や調理前に手洗いをするようになった。 ・調理器具を使用後に洗浄するようになった。 ・水を飲む前に煮沸またはアクアタブを使用するようになった。 ・水を保管する時に蓋を</p>	<p>□ FD6申請後、承認まで39日かかったが、その前にFD7が承認されていたため、効率よく事業を進めることができた。 □ 井戸建設が乾期に行われたため、モンスーン・サイクロンの影響を受けなかった。</p>

<sup>2</sup> クトゥパロンキャンプに隣接しているコンポ3の対象村を管轄しているユニオンの名称。  
ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

<p>いため、適切な衛生行動を取れないことも考えられている。</p>		<p>内となる。                  ・同じ井戸を使用する人数は最大で 125 人となる。                  3-2 720 フィートの深さの乾季に枯れない深井戸が20基建設され、コックスバザール県に引き渡される。                  3-3 500 世帯に対し、ファシリテーターによる水衛生トレーニングが開催される。                  3-4 500 世帯のうちの 8 割が継続的に衛生キットを受領する。                  3-5 20 名の清掃ボランティアが清掃キットを受領する。  <u>確認方法</u>                  3-1 水質検査報告書、モニタリング報告書                  3-2 施工業者からの完了報告書、コックスバザール県の受領書                  3-3 出席簿                  3-4 受領書                  3-5 清掃ボランティアの受領書</p>	<p>・井戸から各家までの距離は平均して 34.8メートルとなった。                  ・同じ井戸を使用する人数は平均して 85 人となった。                  3-2 720 フィートの深さの乾季に枯れない深井戸が22基建設され、ウキヤ郡地方政府に引き渡された。                  3-3 387 世帯に対し、ファシリテーターによる水衛生トレーニングが開催された。                  3-4 衛生トレーニングを受講した 387 世帯のうちの 93%にあたる 361 世帯が 2 回にわたって継続して衛生キットを受領した。                  3-5 22 人の清掃ボランティアが清掃キットを受領した。</p>	<p>3-6 譲渡・贈呈                  3-7 掘削後のモニタリング及び管理と修理の実施                  3-8 衛生キットの追加配布の実施</p>	<p>使用するようになった。                  &lt;副次的成果&gt;                  特になし</p>	
------------------------------------	--	--	--	---	---	--

## 事業終了報告書 (原則8頁以内)

1. プログラム名 ミャンマー避難民人道支援プログラム (初動対応期、緊急対応期)
2. 事業名 バングラデシュ・コックスバザール県ミャンマー避難民に対する水衛生環境改善事業
3. 団体名 認定NPO法人IVY
4. 事業期間 2018年9月10日 ～ 2019年12月31日 (478日間)

## 5. JPF助成金収支概要

	政府支援金	民間資金	総額
予算額	56,562,346円	0円	56,562,346円
執行額	54,201,639円	0円	0円
返還金額	2,360,707円	0円	0円

6. 国内担当者名 安達 三千代

## 7. 事業目的

キャンプ住民とホストコミュニティの住民の水とトイレへのアクセスを向上させ、住環境を整える。衛生関連サービスの提供により、水因性疾病の防止を促す。

## 8. 事業の成果

本事業では、クトゥパロン難民キャンプの2つのキャンプとホストコミュニティにおいて、  
 1) 深井戸掘削と浄化槽付トイレの設置を通じ、安全な水とトイレへのアクセス改善に貢献した。  
 また、2) これらの設備を利用する住民や清掃ボランティアへの衛生に対する意識啓発、維持管理の強化を通じ、コミュニティ挙げての水因性疾病の防止の取り組みに貢献した。

## 9. 事業計画変更の記録

承認日	変更区分	変更内容の概要
2018年10月5日	予算費目追加	現地雇用スタッフ人件費 ・MUKTI 財務マネージャーの役職名変更 ・MUKTI プロジェクトコーディネーター、MUKTI 事業担当会計の追加 理由：ムクティの2つの役職が他の役職名と似ていたため、予算計上が漏れてしまったため。

	予算配分の変更		申請時承認額	変更後
		現地雇用スタッフ人件費	4,239,552円	5,801,992円
		事務所賃貸料	1,356,000円	368,500円
		通信費・銀行手数料	811,156円	670,196円
		現地交通費	844,800円	568,320円
		日当（渡航費）	1,167,000円	1,009,500円
		理由：ムクティのスタッフの計上漏れがあったこと、事務局が予定より安く借りられたこと、通信費が月契約から年契約になり減額、提携団体が車両を出してくれることになり現地交通費が減額、スーパーバイザーが変更になったことにより日当が減額となったため。		
2018年10月30日	予算費目追加	<p>(1) 直接事業費 事業共通経費： 会場費（筆記試験と面接用）、日当（面接官、試験官、会場設営補助員）追加 理由：新しいスタッフの募集と採用が行われているが、150人近い応募者の中から選考するため。</p> <p>(3) 現地事業管理・運営費 現地拠点立ち上げ・整備費： 冷蔵庫、洗濯機、ウォーターサーバー、ガスコンロ、湯沸かし器（取付工事費込み）追加 理由：当初、家具付きの事務所を想定していたが、賃貸物件に家具備品が含まれていなかったため。</p> <p>(3) 現地事業管理・運営費 事務所賃貸料： 現地事務所賃貸料（クトゥパロン）追加 理由：コックスバザール事務所からキャンプまでは渋滞もあり車で1時間以上かかる。そこでキャンプにより近い場所に事務所を借り、そこをフィールド活動の拠点とした方が効率的なため。</p> <p>(3) 現地事業管理・運営費 水道光熱費： ガス代、電気代の追加 理由：当初、光熱費込みの事務所を想定していたが、賃貸料金に含まれていなかったため。</p> <p>(3) 現地事業管理・運営費 現地雇用スタッフ人件費： コックスバザール事務所クリーナー追加 理由：コックスバザール事務所もパートタイムでクリーナーを雇用する必要があることがわかったため。</p>		
2018年12月6日	予算費目追加	<p>(3) 現地事業管理・運営費 現地交通費： ・バス代の追加 目的：キャンプへ通う際、交通手段としてはタクシーを使用していたが、少人数のとき及び他県への出張時にバスを利用可能とす</p>		



		るため。								
2019年4月17日	予算費目追加	<p>1. 現地事業実施経費</p> <p>(1) 直接事業費 コンポーネント 1：<u>井戸修理補助者人件費</u>の追加</p> <p>(1) 直接事業費 コンポーネント 3：<u>井戸修理補助者人件費</u>の追加</p> <p>理由：弊団体が設置したタイプの井戸において、破損時には、30メートル以上のパイプを抜き取るなど、エンジニア一人だけではできない作業が生じたため。</p>								
2019年4月18日	予算費目追加	<p>1. 現地事業実施経費</p> <p>(2) 渡航費</p> <p>・国内交通費、航空旅費、日当、宿泊費、保険料、予防接種費用：<u>現地事業統括補佐</u>の追加</p> <p>(3) 現地事業管理・運営費</p> <p>・国際スタッフ人件費：<u>現地事業統括補佐</u>の追加</p> <p>理由：現地事業統括補佐の雇用に伴い変更が生じたため。</p>								
	予算配分の変更	<p>1. 現地事業実施経費</p> <p>(3) 現地事業管理・運営費</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>申請時承認額</th> <th>変更後</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>現地拠点立ち上げ・設備費</td> <td>501,560円</td> <td>397,320円</td> </tr> <tr> <td>現地事務所運営用備品・事務用品費</td> <td>233,674円</td> <td>337,914円</td> </tr> </tbody> </table> <p>理由：当初、想定していなかったキャンプに近い場所に事務所を開設することになったため、2事務所です務用品費が必要となった。そのため、拠点立ち上げ費の予算を減額し、その分を現地事務所運営用備品・事務用品費に充てるため。</p>		申請時承認額	変更後	現地拠点立ち上げ・設備費	501,560円	397,320円	現地事務所運営用備品・事務用品費	233,674円
	申請時承認額	変更後								
現地拠点立ち上げ・設備費	501,560円	397,320円								
現地事務所運営用備品・事務用品費	233,674円	337,914円								
2019年7月17日	予算費目追加	<p>2. 現地事業実施経費</p> <p>(1) 直接事業費 コンポーネント 2</p> <p><u>トイレ修理補助者人件費</u>の追加</p> <p>理由：雨季の影響によりトイレ周辺で小規模の土砂崩れ由来の被害が生じており、その修理のため。</p> <p>(1) 直接事業費 事業共通経費</p> <p><u>雨具、長靴</u>の追加</p> <p>理由：雨季に入り雨の中での移動を余儀なくされることが多く、キャンプ内の徒歩移動のほか、井戸やトイレを修理する際など雨具や長靴がないと作業に支障をきたすため。</p>								
2019年8月6日	予算配分の変更	<p>トイレ追加建設に伴う予算配分の変更</p> <p>(1) 直接事業費</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>申請時承認額</th> <th>変更後</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		申請時承認額	変更後					
	申請時承認額	変更後								

		コンポーネント1：難民キャンプにおける深井戸掘削及び水衛生関連サービスの提供	12,495,209円	8,495,209円
		コンポーネント2：難民キャンプにおける衛生トイレ建設及びトイレ関連サービスの提供	14,084,328円	18,084,328円
		理由：コンポーネント1で裨益者数が2,000世帯から1,419世帯へ減少したことや、衛生キットが他団体と重複していたため配布中止となったため、それらの予算（約400万円）が未消化となっているので、コンポーネント2に変更し、トイレ40基追加設置費用に充てるため。		
	期間変更	2019年11月14日まで事業期間を延長 理由：新たにキャンプ13でのトイレのニーズに応えるべく、浄化槽付きトイレ40基の設置工事を行うとともに、衛生トレーニング、清掃トレーニングを行い、下痢等の感染症を予防するため。		
2019年11月12日	期間変更	2019年12月31日まで事業期間を延長 理由：8月28日NGO局よりムクティの事業が停止命令を受けたが、建設が途中で止まっているトイレ40基の設置、深井戸7本の掘削と衛生関連サービスの提供などを完了させるため。		
2019年12月24日	事業中止		当初予定事業内容	変更状況
		コンポーネント2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生トイレ40基追加設置予定</li> <li>・トイレ工事モニタリング</li> <li>・水衛生トレーニング20回開催</li> <li>・清掃トレーニング2回開催</li> <li>・モニタリング</li> <li>・アセスメント3回目</li> <li>・修理・汲み取り</li> <li>・譲渡</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衛生トイレ追加設置予定40基のうち10基は完了、30基は中止</li> <li>・譲渡は工事完了した10基のみ完了</li> <li>・トイレ工事モニタリング</li> </ul> <p>その他の活動は中止 ※譲渡のみ10基完了</p>

		<p>コンポーネント3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2村で深井戸9本追加掘削予定</li> <li>・水衛生トレーニング9回開催</li> <li>・清掃トレーニング</li> <li>・モニタリング</li> <li>・修理</li> <li>・譲渡</li> <li>・衛生キット配布</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・井戸追加掘削予定9本のうち2本は完了、7本は中止</li> <li>・2本の井戸の裨益者対象(26人)に水衛生トレーニング開催</li> <li>・同じく2人の清掃ボランティア対象に清掃トレーニング</li> <li>・モニタリング3回実施</li> <li>・譲渡 工事完了した2本のみ完了</li> <li>・衛生キット配布1回実施</li> <li>・アセスメント2回実施</li> </ul> <p>その他の活動は中止</p>															
		理由：11月30日で事業の完全中止を求めるNGO局の通達により、中止せざるを得ない活動がでてきたため。																
2020年2月3日	予算費目追加	<p>3. 現地事業実施経費</p> <p>(1) 直接事業費 事業共通経費</p> <p>事務所賃貸料(クトゥパロン事務所)、MUKTI プロジェクトコーディネーター人件費、MUKTI 事業担当会計人件費、MUKTI 事務所庶務人件費の追加</p> <p>理由：IVYと直接雇用契約のないスタッフの人件費と提携団体の事務所費用は直接事業費に計上が可能となったため。</p>																
	予算配分の変更	<p>1. 現地事業実施経費</p> <p>(2) 現地事業実施経費</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>申請時承認額</th> <th>変更後</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>渡航費</td> <td>2,102,164円</td> <td>2,657,559円</td> </tr> </tbody> </table> <p>(3) 現地事業管理・運営費</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>申請時承認額</th> <th>変更後</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>国際スタッフ人件費</td> <td>4,577,187円</td> <td>5,702,982円</td> </tr> <tr> <td>現地雇用スタッフ人件費</td> <td>5,801,992円</td> <td>4,120,802円</td> </tr> </tbody> </table> <p>理由：ビザの取得期間が短縮されたことに依る航空運賃の増額、国際スタッフの増員、期間延長に依る人件費増額のため。</p>			申請時承認額	変更後	渡航費	2,102,164円	2,657,559円		申請時承認額	変更後	国際スタッフ人件費	4,577,187円	5,702,982円	現地雇用スタッフ人件費	5,801,992円	4,120,802円
	申請時承認額	変更後																
渡航費	2,102,164円	2,657,559円																
	申請時承認額	変更後																
国際スタッフ人件費	4,577,187円	5,702,982円																
現地雇用スタッフ人件費	5,801,992円	4,120,802円																

## 10. 成果の達成度とそこから得た学び(コンポーネント別)

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

## (1) コンポーネント1：難民キャンプにおける深井戸掘削及び水衛生関連サービスの提供

## (ア) 配布物、設置物、研修等の詳細

計画	実施が計画と異なる点があれば記載
井戸から汲み上げた100mlあたりの水に、大腸菌がないことが水質検査で確認される。	計画通りに実施
1人1日あたり10-15リットルの水を使用できる。	計画を上回った(28.2リットル)
井戸の給水所での待ち時間は最大で30分間となる。	計画を上回った(最大15分・平均4.3分)
井戸から各家までの距離は200メートル以内となる。	計画を上回った(最大30メートル・平均12.1メートル)
同じ井戸を使用する人数は最大で500人となる。	計画を上回った(最大485人・平均321人)
720フィートの深さの乾季に枯れない深井戸が20基建設され、コックス県に引き渡される。	井戸の本数は計画を上回った(21基)が、井戸の深さは計画を下回った(704フィート)
2,000世帯に対し、ファシリテーターによる水衛生トレーニングが67回開催される。	計画を下回った(1,499世帯、55回) <sup>3</sup>
2,000世帯のうちの6割が継続的に衛生キットを受領する。	計画通りに実施(7.5割)
20人の清掃ボランティアが清掃キットを受領する。	計画を上回った(21人)

## (イ) 成果の達成度(以下の3つから選択)

1. 計画以上に達成した **2. 計画通りに達成した** 3. 計画通りには達成できなかった

## (ウ) 達成度を判断した理由とそこから得た学び

## 【成果(達成度)】

クトゥパロン難民キャンプ内のキャンプ19に20基、キャンプ8Wに1基、計21基の深井戸を掘削。難民キャンプ造成時に掘られた井戸は浅く、乾季における水の供給に問題があったため、豊富な被圧帯水層<sup>4</sup>のある640~720フィートの深さまで井戸掘削を行なった<sup>5</sup>。深く掘削したことにより、水量が豊富なだけでなく、地表からの影響が少ないため大腸菌群のいない水を汲み上げることができた。また、目標としたスフィアスタンダードやWASHクラスターの最低基準を、表1の通り大幅にクリアすることが出来、安全な水へのアクセス改善に貢献できた。

【表1：最低基準と実績】

最低基準	実績
WASHクラスター基準:井戸から汲み上	井戸から汲み上げた水100mlあたりに大腸菌が

<sup>3</sup> 裨益世帯数が計画よりも下回ったため、水衛生トレーニング参加世帯も同様に計画を下回ったが、裨益対象となる全世帯から代表1人ずつ参加した。

<sup>4</sup> 井戸の取水が連続して可能な地層を帯水層と呼び、透水性の低い加圧層に上下を挟まれた層を被圧帯水層と言う。

<sup>5</sup> 参考資料「コンポ1:3)井戸の深さ一覧」参照

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

げた水 100ml あたりに大腸菌がない	いない
WASH クラスター基準：1日1人あたり 10～15 リットル	1日1人あたり 平均 28.2 リットル
スフィア基準：井戸の給水の待ち時間 30 分未満	井戸の給水の待ち時間 平均約 4.3 分
スフィア基準：井戸から家庭までの距離 200 メートル未満	井戸から家庭までの距離 平均 12.1 メートル
スフィア基準：同じ井戸を使用する人数 500 人未満	同じ井戸を使用する人数 平均で 321 人

【表 2：以前の井戸と新しい井戸との比較】

基準	以前の井戸	新しい井戸
①1日・1人あたりの給水量 10 リットル以上	9.95L	28.2L
②水汲み時の待ち時間 30 分未満	15.9 分	4.3 分
③家庭から井戸までの距離 200 メートル未満	47.2m	12.1m

井戸の掘削を行なったキャンプ 19 は、幹線道路から離れた場所にあつて、工事車両が入りにくくインフラの整備も遅れていたため、井戸掘削の緊急度が高い地域だった。しかし、他キャンプに比べると人口密度が低く、裨益者数はキャンプ 8W と合わせて 6,739 人<sup>6</sup>、深井戸 1 基あたりの平均裨益者数は 321 人となった。

裨益者数は計画より少なくなったが、給水の待ち時間が平均 4.3 分と以前より 11.6 分短くなり、併せて家庭と井戸の距離が平均 12.1 メートルと 35.1 メートル近くなったことで、水汲みにかかる各世帯の時間と労力が軽減された。井戸が近くにできたことで、以前は家まで水を運んでいたが、井戸場で洗濯ができるようになったという声も聞かれた。

井戸掘削後のアセスメント<sup>7</sup>で、掘削した井戸に対する「清潔さ」「快適さ」について聞き取りを行なったところ、全員が「井戸は清潔でありかつ快適に使用している」と回答、また井戸に関するハラスメントも起きていないとのことであり、脆弱層にとっても安全で安心出来る井戸へのアクセスが向上したと言える。

また、井戸の裨益者を対象（各世帯から 1 人）とした水衛生トレーニング 55 回と衛生キット配布、清掃ボランティアを対象とした清掃トレーニング 2 回と清掃キットの配布、井戸の修理を含む衛生関連サービスを実施した。井戸 1 基に 1 人の清掃ボランティアが選ばれ、毎

<sup>6</sup> 参考資料「コンポ 1：1）裨益者数」参照

<sup>7</sup> アセスメントは、キャンプ 19 の 3 つの地点（サブブロック A6・C2・D5）で、10 人ずつ（男女別に子ども 1 人、成人 2 人、高齢者 1 人、障害者 1 人の計 10 人）に対して行なった。

日清掃を行なったことで井戸周辺を清潔に保つことが出来た。

水衛生トレーニングの成果をはかるため、全裨益世帯の14%に当たる、210世帯210人（井戸1基につき10世帯）にモニタリングを実施した。

【表3：トレーニング実施前と実施後の比較】

項目	トレーニング前	トレーニング後
①排泄後、石鹸で手を洗う	14.8%	100%
②調理前、手を洗う	75.2%	100%
③調理器具を使う前に洗う	77.1%	100%
④飲み水は、煮沸かアクアタブを使用	0.4%	100%
⑤水を保管する際に蓋をする	70.4%	100%

\*詳しくは【参考資料「コンポ1：5）モニタリング結果】

上記の表3から、トレーニングによる衛生行動の改善が全体に浸透しており、特に排泄後の手洗い、水を飲む前の煮沸またはアクアタブの使用に関する変化が顕著であることから、トレーニングにより手洗いや飲み水の管理の重要性について住民の意識が向上し、水因性の下痢の予防に貢献することができた。

事業終了後の譲渡先は当初ホストコミュニティ同様コックスバザール県への譲渡と聞いていたが、キャンプ内の建設された施設については、WASH クラスターのルールにのっとり CiC に譲渡することになっていたため、当該井戸のある CiC に譲渡のレターを提出し承認を得た。譲渡後の井戸は、CiC から委託を受けたパートナー団体が管理している。

以上のエビデンスにより、コンポーネント1は計画通りに達成したと判断した。

### 【学び】

2018年3月の初動調査と4月の追加調査時の聞き取りでは、キャンプ4において、深井戸が必要とされ、CiC およびキャンプ WASH フォーカルが井戸を掘削する団体を探していたため、キャンプ4での活動を想定した。しかし、4か月後に事業開始となった9月時点では同キャンプで活動している他団体によって掘削が進められていた。そのため、WASH セクター発表のデータを元に、特にニーズギャップが大きいキャンプから当たりをつけたが、他団体の掘削計画がすでに進んでおり、他の候補地を探すことになった。場所の決定にはニーズギャップのデータと他団体の動向の2つの情報の収集が必要であり、想定した以上に時間がかかった。今後、実施キャンプを探すときは、データを参照すると共に、セクターリード、ワーキンググループ議長およびエリアフォーカルなど全体のギャップやニーズを把握しているところと直接話し合い、より効率的に対象キャンプを探すだけでなく、キャンプ WASH フォーカルに紹介してもらえることで、場所決定までの時間を短縮できることを学んだ。

## (2) コンポーネント 2：難民キャンプにおける衛生トイレ建設及びトイレ関連サービスの提供

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

## (ア) 配布物、設置物、研修等の詳細

計画	実施が計画と異なる点があれば記載
鍵付きの男女別衛生トイレが90基建設され、コックスバザール県に引き渡される。	計画を上回った(100基)
同じトイレを使用する人数は最大で20人となる。	計画通りに実施(最大20人・平均12.8人)
トイレから各家までの距離は50メートル以内となる。	計画通りを上回った(最大40メートル・平均9.9メートル)
720世帯に対しファシリテーターによるトイレ利用に関するトレーニング24回が開催される。	計画を下回った(607世帯、22回) <sup>8</sup>
720世帯のうちの6割が継続的に衛生キットを受領する。	計画を上回った(8.4割)
90人の清掃ボランティアが清掃キットを受領する。	計画を上回った(100人)
浄化槽の充足率が80%を超えた場合には、2週間以内に汲み取りが行われる。	計画を下回った <sup>9</sup>

## (イ) 成果の達成度(以下の3つから選択)

1. 計画以上に達成した 2. 計画通りに達成した 3. 計画通りには達成できなかった

## (ウ) 達成度を判断した理由とそこから得た学び

## 【成果(達成度)】

WASH クラスターでは、2018年の新たな対応として、野外や屋内で排泄する\*住民の数を減らし、地下水汚染や感染症防止対策のため、難民キャンプ造成当時のトイレ利用者数基準である「トイレ1室あたりの利用者数50人以下」から、スフィア基準の「1室あたりの利用者20人以下、トイレから各家までの距離は50メートル以内」を遵守したトイレ建設を進めるという新たな方針が打ち出された。そこで、弊団体では、ギャップのあるクトゥパロン難民キャンプ内のキャンプ19に90基、キャンプ13に10基、計100基(1基につきトイレ2室、計200室設置)のトイレを設置した。

\*老人や幼児、女性が、トイレが遠い、鍵が壊れていて使いたくない、トイレに行くまでの道に電灯がない等の理由で住居内で排泄する(特に夜間)ケースが報告されており、アセスメントでも確認された。

100基のトイレ増設の結果、表4のとおり、当該地区ではスフィア基準をクリアすることができた。

【表4：最低基準と実績】

最低基準	実績
スフィア基準：同じトイレを使用する人	同じトイレを使用する人数 平均12.8人

<sup>8</sup> 裨益世帯数が計画よりも下回ったため、トイレ利用に関するトレーニング参加世帯も同様に計画を下回った。

<sup>9</sup> し尿の汲み取りはし尿処理場を運営している団体による実施が通常であり、事業計画時に活動として挙げたが、実際はIVYが行うことではなかったため、本事業での対応は不必要だった。  
 ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

数は最大で20人となる。	
スフィア基準：トイレから各家までの距離は50メートル以内となる	トイレから各家までの距離 平均9.9メートル

また、事業開始時に行われたアセスメント<sup>10</sup>で、野外や屋内で排泄する理由について聞いたところ、「近くにトイレがない、男女別にトイレが分かれていない、トイレが汚物で溢れている」等の理由が多く挙げられた。

そこで、弊団体では、野外や屋内での排泄を減らすため、単にトイレの数を増やすだけでなく、この調査結果をもとに、住民の住居の近くに建設用地を探し、ドアに内側から鍵がかかるようにし、男性女性それぞれ別の立地に独立したトイレを設置した結果、夜間や雨の日でも、付き添いがいなくても、高齢者や障害者、子ども、女性が安心して気軽にトイレを利用できるようになり、野外や屋内排泄が減り、トイレへのアクセスを改善することができた。

裨益者数は2,567人<sup>11</sup>であり計画より少なかったが、幹線道路から離れているだけでなく他のキャンプと比較してインフラ整備が遅れており、トイレに対してニーズの高いキャンプで設置できた。

また、衛生トイレの裨益者を対象としたトイレ利用に関するトレーニング22回と衛生キットの配布、清掃ボランティアを対象とした清掃トレーニング3回と清掃キットの配布、トイレのメンテナンスを含む衛生関連サービスを実施した。トイレ1基に1人の清掃ボランティアが選ばれ清掃を行なった。

事業終了後の譲渡先については、コックスバザール県への譲渡ではなく、WASH クラスターのルールに則り当該トイレのあるCiCに譲渡のレターを提出し承認を得た。CiCは当該トイレのメンテナンスについて、同キャンプで活動しているキャパのあるパートナー団体に管理を委託した。

トイレ利用に関するトレーニングの成果をはかるため、裨益者数の14.0%に当たる、360人（トイレ1基につき1世帯1人ずつ4世帯から聞き取り）にモニタリングを実施した。

【表5：衛生トレーニング実施前と実施後の比較】

項目	トレーニング前	トレーニング後
①排泄後、石鹸で手を洗う	2.9%	97.8%
②調理前、手を洗う	61.3%	100%
③調理器具を使う前に洗う	83.2%	100%

<sup>10</sup> アセスメントは、キャンプ19の3つの地点（サブブロックA9・C3・D9）で、10人ずつ（男女別に子ども1人、成人2人、高齢者1人、障害者1人の計10人）に対して行なった。

<sup>11</sup> 参考資料「コンポ2：6」裨益者数」参照

ジャパン・プラットフォーム提出用（フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。）



トイレ使用後の石鹸での手洗い、調理前の手洗いに関して丁寧に指導した結果、手洗いの重要性について住民の気づきや理解が深まり、表5のとおり、適切な衛生行動が促されたことが把握できた。

以上のエビデンスにより、コンポーネント2は計画通りに達成したと判断した。

### 【学び】

2019年7月に、トイレの建設工事費が三者見積の結果、下がった他、キャンプ19の裨益者数が想定していた数よりも少なかったため、トイレの不足しているキャンプ13での40基の追加工事を計画した。しかし、P2の脚注1に記載の事件をきっかけに、8月28日NGO局により現地提携団体の難民キャンプ内での全事業が停止され、この追加工事を中断せざるを得なくなった。その後、11月30日までに事業を完全に中止するよう通達があり、40基のうち工事が進んでいた10基のみ完成させ、工事を中止せざるを得なかったことは何とも遺憾な出来事であった。難民支援は、常にホストコミュニティと難民との間に非常にセンシティブな関係をはらんでおり、そこに配慮する受け入れ国政府の対応などで、過失がなくとも事業を取り巻く情勢が一変する、割を食う場合があることを学んだ。

この教訓を今後の事業にどのように生かしていくのか、具体的な対応策を以下に述べる。

### 【事案発生時の対応】

- 1) 現地事業統括が大使館に第一報（メール、電話）
- 2) 現地事業統括が人を介しての情報だけでなく直接関係者に会い情報収集
- 3) 大使館に正確な情報、分析結果を報告、面談の取り付け
- 4) 大使館で面談、対策を協議（事業総括も渡航）
- 5) NGO局と大使館、弊団体が面談、対策を協議

今回は、大使館へ自分たちが直接足を運ぶまでに4か月近くの時間が経過してしまった。メールでのやり取りだけでは時間も要し埒が明かないこともあるので、上記のようなフローで、本事業が日本の政府資金で実施<sup>12</sup>されていることを大使館からNGO局に伝えてもらい、早めにNGO局と直接協議できるところまでもっていければ早期に解決できたと思われる。

## (3) コンポーネント3：ホストコミュニティにおける深井戸掘削及び水衛生関連サービスの提供

### (ア) 配布物、設置物、研修等の詳細

計画（数値等、事業計画書に基づく）	実施が計画と異なる点があれば記載
井戸から汲み上げた100mlあたりの水に大腸菌がないこ	計画通り実施

<sup>12</sup> FD7の申請用紙に記載する事業名は慣例で正式な事業名ではなく、単に「WASH Project」等と簡略化して申請する。日本の政府資金と明示できる欄もないので、大使館がNGO局に問い合わせた際も、どの事業か判明するまでに時間がかかり、判明したのは事業中止命令発出後だった。

ジャパン・プラットフォーム提出用（フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。）

とが水質検査で確認される。	
1日あたり10～15リットルの水を使用できる。	計画を上回った（28.7リットル）
井戸の給水所での待ち時間は最大で30分間となる。	計画を上回った（最大で5分・平均30秒）
井戸から各家までの距離は200メートル以内になる。	計画を上回った（最大70メートル・平均34.8メートル）
同じ井戸を使用する人数は最大で125人になる。	計画を下回った（最大153人・平均85人）
720フィートの深さの乾季に枯れない深井戸が20基建設され、コックスバザール県に引き渡される。	計画を上回った（22基、深さ平均728フィート）
500世帯に対し、ファシリテーターによる水衛生トレーニングが開催される。	計画を下回った（387世帯） <sup>13</sup>
500世帯のうちの8割が継続的に衛生キットを受領する。	計画を下回った（7.7割）
20人の清掃ボランティアが清掃キットを受領する。	計画を上回った（22人）

(イ) 成果の達成度（以下の3つから選択）

1. 計画以上に達成した  2. 計画通りに達成した  3. 計画通りには達成できなかった

(ウ) 達成度を判断した理由とそこから得た学び

【成果（達成度）】

避難民キャンプにおける地下水の過剰揚水により地下水位が下がり、浅井戸が枯れるなどの悪影響が出ていたホストコミュニティ2村において、テルコラ村に14基、ムサコラ村に8基、計22基の深井戸を掘削出来たことにより、表6のとおり、目標とした最低基準を大幅にクリア出来た。

【表6：最低基準と実績】

最低基準	実績
WASH クラスター基準：井戸から汲み上げた水100mlあたりに大腸菌がない	井戸から汲み上げた水100mlあたりに大腸菌がない
WASH クラスター基準：1日1人あたり10～15リットル	1日1人あたり 平均28.7リットル
スフィア基準：井戸の給水の待ち時間30分未満	井戸の給水の待ち時間 なし
スフィア基準：井戸から家庭までの距離200メートル未満	井戸から家庭までの距離 平均34.8メートル

<sup>13</sup> 裨益世帯数が計画よりも下回ったため、水衛生トレーニングの回数、参加世帯とも計画を下回った。

スフィア基準：同じ井戸を使用する人数 500人未満	同じ井戸を使用する人数 平均で85人
------------------------------	--------------------

今までの水汲み場は崖下にあり、家からの距離も300メートル近くあったため、水汲みに多くの時間や労力を費やしていた。また、重い水汲み容器を頭に載せたり脇に抱えたりしての崖の上り下りは非常に危険で、滑落や転倒による事故も多かった。しかし、井戸が家の近く、平均34.8メートルの場所に出来たことにより、労力や危険が大幅に軽減された。井戸掘削後のアセスメント<sup>14</sup>で掘削した井戸に対する「清潔さ」「快適さ」について聞き取りを行なったところ、全員が清潔でありかつ快適に使用している、また井戸に関するハラスメントも起きていないと回答した。以上のことから、住民1,860人が大腸菌群のない安全でかつ安定した水量のある井戸へのアクセスに貢献した。

1基あたりの使用者数は1つを除き目標の125人をクリアし、平均使用者数は85人となった。

対象2村の中で井戸を掘った地区は、住民の家が山頂や尾根伝いにあるため、湧き水が得られる水源までは険しい崖を下っていかなければならなかったところで、水質も悪く、難民流入後に一層水の量が減る等深刻な問題を抱えていた。そのため、標高の高い地区での掘削工事は困難を極めたが、これらの地区に井戸を提供できたことで、難民との軋轢緩和に貢献できた。

また、井戸の裨益者を対象とした衛生トレーニング22回と衛生キットの配布、清掃ボランティアを対象とした清掃トレーニング4回と清掃キット配布を含む衛生関連サービスを実施した。清掃ボランティアのモチベーションは高く、井戸1基につき1人の清掃ボランティアが井戸の周辺の清掃を毎日続けており、衛生的に保たれている。

衛生トレーニングの成果をはかるため、全裨益世帯の11.8%に当たる、220世帯220人(井戸1基につき10世帯)にモニタリングを実施した。

#### <トレーニング実施前と実施後の比較>

項目	トレーニング前	トレーニング後
①排泄後、石鹼で手を洗う	2.9%	96.4%
②調理前、手を洗う	61.3%	100%
③調理器具を使う前に洗う	77.1%	100%
④飲み水は、煮沸かアクアタブを使用	0%	71.8%
⑤水を保管する際に蓋をする	91.2%	100%

<sup>14</sup> アセスメントは、各村で10人ずつ(男女別に子ども1人、成人2人、高齢者1人、障害者1人の計10人)に対して行なった。

\*詳しくは【参考資料「コンポ3：14）モニタリング結果】参照

上記の表から、トレーニングによって、人々の衛生行動が改善されたことがわかる。特に、手洗いについては、トレーニング前、ほとんどの人々が排泄後に石鹸で手を洗っていなかったが、トレーニング後には、100%近い人が石鹸で手を洗うようになった。調理前に手を洗う人は100%になった。

なお、水衛生トレーニング終了後に、アクアタブの配布を予定していたが、キャンプと違い、ホストコミュニティでは、人口密度が極めて低いため、野外排泄などによる地下水の汚染等が起きていなかったため、アクアタブの配布を中止し、現地の住民のニーズが高かった石鹸の配布を行った。

以上により、コンポーネント3は計画通りに達成したと判断した。

### 【学び】

深井戸の裨益者数は2,500人を見込んでいたが、実際は1,860人に留まった。理由として、ホストコミュニティ2村に住む住民数は入手していたが、村の中でも掘削したパラ（集落）の人口までは把握できておらず、結果として裨益者数が計画を下回った。今後はホストコミュニティの中でも村・パラレベルを統括するユニオンの担当者から情報を収集することで、より綿密な計画を立てることができることを学んだ。

アクアタブの配布中止についても、前述のとおりで、計画時に住民の生活環境の違いに着目したニーズ調査が必要なことを学んだ。

## 11. 事業の自己評価とその根拠

### (1) 事業計画・実施の妥当性・適切性 (Relevance/Appropriateness)

・難民キャンプでの実施においては、各キャンプ内の水衛生施設の情報を統括しているサイトマネージメントチームおよびWASHフォーカルと協議し、WASHセクターの指標に対して初動時期から中長期的な支援への移行時期に必要なとされる安定的な水の供給、安全な水質を確保した深井戸、およびキャンプ造成期の急ごしらえのトイレが各地で閉鎖されている時期でありトイレの設置が求められていたこと、1つのトイレ利用人数をスフィアの基準まで減らす方針に沿った衛生トイレの設置を、トイレが不足しているサブブロックで設置を進めたこと、以上により事業実施は妥当であったといえる。

・深井戸や衛生トイレの建設前に、使用するコミュニティに対して、設置場所や井戸・トイレの仕様についてのアセスメントを実施し、その結果を取り入れながら設置を進めた。特に衛生トイレにおいては、子どもや高齢者が利用しやすいように階段を設置、高齢者のために手すりがほしいとの要望があったため、2室のうち1室に手すりを設置した。アセスメントを行なったことで、コミュニティの声を反映し、しかもそれらの人々に多かった野外や屋内排泄が行われなくなり、感染症のリスク要因を減らせるなど、事業の目的達成にかなった内容となった。

・弊団体はバングラデシュ政府のNGO登録を持っていないため、カウンターパートとして、コックスバザール県に本部を置くムクティと連携して事業を行った。ムクティはこれまで国連や他のNGOとの連携を数多く経験しているため、本事業においても事業承認など滞りなく実施することができた。しかし、10.(2)にも記載した通り、他の事業の影響により本事業のコンポーネント2は約3ヶ月間活動休止を余儀なくされるなど、想定外の事態が発生した。

## (2) 事業の連結性または持続可能性 (Connectedness or Sustainability)

・キャンプ内における井戸やトイレの提供においては、水衛生トレーニングや清掃トレーニングおよびモニタリングを通して、設置場所の相談やトレーニング場所の提供など、地区コミュニティと協力しながら活動を行うことができ、結果として彼らのキャパシティビルディングに寄与することができた。

・キャンプにおいては深井戸や衛生トイレはCiCに譲渡された。また、修理や管理にあたっては、キャンプWASHフォーカルが同キャンプ内で活動している他団体と協議し、キャパシティのある団体に託すなど、事業撤退後に破損が生じても継続して使用されるようになっている。

・3つのコンポーネントとも、住民に対する衛生トレーニングと、各コミュニティから清掃ボランティアを選出し清掃トレーニングを実施した。衛生トレーニング実施後のモニタリング結果からは、設置時の清潔で快適な井戸やトイレの状態を継続していきたいという意識が住民に芽生えていることが伺われる。清掃ボランティアは自分の担当箇所を1日2回清掃するようになり、深井戸や衛生トイレが継続して衛生的な状態に保たれるようになっている。

・ホストコミュニティでは、深井戸を使用するエリアのリーダーに対し、譲渡時に井戸の適切な使い方、メンテナンスが必要な部分と交換時期、清掃方法等井戸の管理方法について説明を行った。また清掃ボランティアが井戸周辺を定期的に清掃しており、井戸はエリアリーダー・清掃ボランティアを中心に住民自身によって管理され、継続的に使用できるようになっている。

## (3) 事業実施における効率性 (Efficiency)

### ・予算面での効率性

計画では難民キャンプ内に深井戸20基、衛生トイレ90基、ホストコミュニティに深井戸を20基としていたが、一般競争入札を行なったことで各単価が下がり、難民キャンプに深井戸21基、衛生トイレ100基、ホストコミュニティに深井戸を22基設置することができたことにより、効果的に予算を使用することができたといえる。

### ・時間面での効率性

計画時には12ヶ月の事業期間だったが、2度の延長申請を行い、3.5ヶ月延長して15.5ヶ月となったため、時間面での効率性が29%低下した。

期間延長の1回目の理由は、新たにキャンプ13でのトイレのニーズに応えるべく、トイレ40基の設置工事や衛生トレーニング、清掃トレーニングを行い、下痢等の感染症を予防するためだった。2回目は10.(2)でも述べたとおり、トイレ工事の完了途中で事業停止となっ

たためである。

本事業の経験から、今後時間面での効率性を高めるためには、1) 調整に時間がかかることがわかっているので、ニーズ把握と予算消化状況は早めに把握する、2) 追加工事に着手する場合はまず期間内に完了できるかを検討する、等が必要である。

- ・プロセスの効率性

対象とするキャンプを探す段階で、WASH セクターの資料(WASH Facility Gap Analysis 等)をもとに探したが、本来であれば WASH セクターやエリアフォーカル(国連団体)から直接情報を収集することで、深井戸や衛生トイレのニーズのあるキャンプの情報をより効率的に収集することができたと考えられるが、新規参入のためプロセスを把握しきれていなかった。状況の把握が進むことで、効率的な動きができるようになり改善していくことができた。

- ・リソースの効率性

本事業のプロジェクトスタッフの多くは、既に難民キャンプにおいて他団体で支援した経験のある者(例えばエンジニアにおいては掘削方法だけでなく、難民キャンプエリアの帯水層に詳しいなど)も少なくなく、人材とその技術などのリソースを十分活用できたといえる。

#### (4) 事業実施における有効性 (Effectiveness/Timeliness)

- ・難民キャンプにおいては、当時深井戸が不足していたキャンプ 19 に深井戸 20 基、また水不足が深刻であるため掘削要請のあったキャンプ 8W で 1 基設置したことにより、計 21 基の深井戸を難民キャンプに設置することができた。裨益者のラシダ・ベグムさん(女性 27 歳)からは「毎日 2 回、朝と夕方に井戸を利用している。飲み水として活用するほか、洗濯、調理、水浴び用にも使っており、家の近くに井戸ができたので、水を家まで運ぶのもだいぶ楽になった」との声が聞けた。

- ・衛生トイレにおいてはキャンプ 19 に 90 基、キャンプ 13 にも 10 基、計 100 基設置した。トイレ利用に関するトレーニングの内容は、深井戸の水衛生トレーニングとほとんど同様だったため、深井戸の裨益世帯以外の世帯を対象にして、各世帯の代表に対して実施した。裨益者のランザンさん(男性 55 歳)は「トイレは快適に使えている。妻が IVY の衛生研修に参加しており、石鹸を使ってきちんと手洗いするなど、そこで学んだことを家族に共有してくれ、家族全員で実践している。」と語るなど、実際に行動変容につながったという声もある。

- ・一方で、ホストコミュニティの対象 2 村では事業開始時にも依然として水不足は深刻だった。その中でも特に深刻なパラ(集落)への 22 基の深井戸の設置により、水へのアクセスが大きく向上した。各裨益世帯の代表への水衛生トレーニングと清掃ボランティアへの清掃トレーニングの実施を通して、「家族が下痢を起こす回数が減った」(アンワラ・ベグムさん、女性 35 歳)という意見も聞くことができた。

以上により、本事業は有効であったと言える。

#### (5) 事業実施に際しての調整 (Coordination)

- ・難民キャンプにおける活動の全体方針についてはWASHセクターと調整し実施を進めつつ、水関連はセクター内の水技術ワーキンググループ、トイレに関しては衛生技術ワーキンググループ、トレーニング関連は衛生促進ワーキンググループの各ミーティングに参加し、井戸・トイレの設置キャンプの調整等を行なった。
- ・一方、キャンプレベルではキャンプWASHフォーカルを中心に、隔週開催されるキャンプWASHコーディネーションミーティングに必ず参加し、同じキャンプ内で活動する他団体と情報共有および調整を行なった。また、同様に隔週開催されるCiCミーティングにも参加し、他のセクターで活動をしている団体やマージ、サブマージと、キャンプ全体の情報共有・調整を行った。
- ・また、ホストコミュニティにおいてはウキヤ郡地方政府代表の承認の下、パロンカリユニオンと調整して実施を進めた。

#### (6) 事業実施によるインパクト (Impact)

- ・難民キャンプでは、難民がホストコミュニティの所有する井戸に水を汲みに行くなどして、トラブルになることも少なくなかったが、本事業でホストコミュニティにも深井戸を設置したことで、ホストコミュニティ住民との軋轢回避に繋がった。
- ・ホストコミュニティでは、これまで飲み水を汲めるところが住居から遠いことも珍しくなく、女性が水を汲みに行っている道中に男性に嫌がらせを受けることもあったが、本事業で住居から近いところに深井戸を設置できたことで、嫌がらせを受けることが少なくなったという裨益者の声があった。
- ・清掃ボランティアは、指名ではなく、希望者が自ら手を上げ決まるという展開になった。また、難民キャンプの住民からトイレの周囲の清掃について問題があると指摘があったが、その際に解決策についても言及があり、設置した井戸・トイレを自らが守っていくという姿勢が見られた。
- ・難民キャンプでの実施においては、各キャンプ内の水衛生施設の情報を統括しているサイトマネージメントチームおよびWASHフォーカルと協議し、WASHセクターの指標に対して初動時期から中長期的な支援への移行時期に必要とされる安定的な水の供給、安全な水質を確保した深井戸、およびキャンプ造成期の急ごしらえのトイレが各地で閉鎖されている時期でありトイレの設置が求められていたこと、1つのトイレ利用人数をスフィアの基準まで減らす方針に沿った衛生トイレの設置を、トイレが不足しているサブブロックで設置を進めたことにより、事業実施は妥当であったといえる。
- ・深井戸や衛生トイレの建設前に使用するコミュニティに対して、設置場所についてのアセスメントを実施し、それに応じて設置を進めた。特に衛生トイレにおいては、地域より一定数の高齢者がおり、手すりを設置してほしいとの要望があったため、2室のうち1室に手すりを設置した。このようにコミュニティの主体性を重視し、信頼性を満たした事業実施であるといえる。
- ・弊団体はバングラデシュ政府のNGO登録を持っていないため、カウンターパートとして、

コックスバザール県に本部を置くムクティと連携して事業を行った。ムクティはこれまで国連や他のNGOとの連携を数多く経験しているため、本事業においても事業承認など滞りなく実施することができた。しかし、10.(2)にも記載した通り、他の事業の影響により本事業のコンポーネント2は約3ヶ月間活動休止を余儀なくされるなど、想定外の事態が発生した。

(7) 事業の連結性または持続可能性 (Connectedness or Sustainability)

・キャンプ内における井戸やトイレの提供においては、水衛生トレーニングや清掃トレーニングおよびモニタリングを通して、地区コミュニティを巻き込み、協力しながら活動を行うことができ、結果として彼らのキャパシティビルディングに寄与することができた。一方で、ホストコミュニティにおいては事業計画書に「ウキヤ郡衛生局のエンジニアとともに事業を実施し、最終引き渡し後に彼らが補修や管理を担当できるようにする」と記載したが、実際のところウキヤ郡エンジニアはウキヤ郡地方政府代表による事業承認において関わるだけであることがわかった。

・キャンプにおいては深井戸や衛生トイレはCiCに譲渡された。また、修理や管理にあたっては、キャンプWASHフォーカルが同キャンプ内で活動している他団体と協議し、キャパシティがある団体に託すなどにより、事業撤退後に破損が生じても継続して使用されるようになる。また、各コミュニティから清掃ボランティアを選出し、清掃トレーニングを実施したことで、各清掃ボランティアが1日2回清掃するようになり、深井戸や衛生トイレが継続して衛生的に使用されるようになっていく。一方、ホストコミュニティでは、深井戸を使用するコミュニティによって管理されることで、継続的に使用できるようになる。衛生面に関しては難民キャンプと同じ出口戦略を取った。

(8) 事業実施における効率性 (Efficiency)

・予算面での効率性

計画では難民キャンプ内に深井戸20基、衛生トイレ90基、ホストコミュニティに深井戸を20基としていたが、一般競争入札を行なったことで各単価が下がり、難民キャンプに深井戸21基、衛生トイレ100基、ホストコミュニティに深井戸を22基設置することができた。そのため、効果的に予算を使用することができた。

・時間面での効率性

計画では9月の事業開始から2ヶ月間調整を行い、その後各トレーニングや井戸の掘削を想定していたが、MoUの締結、FD7取得、プロジェクトスタッフの採用、業者の入札など想定よりも時間を要すなどあり、計画時には12ヶ月の事業期間だったものが、3.5ヶ月延長した結果、15.5ヶ月となったため、29%の効率性が低下した。

・プロセスの効率性

対象とするキャンプを探す段階で、WASHセクターの資料(WASH Facility Gap Analysis等)をもとに探したが、本来であればWASHセクターやエリアフォーカル(国連団体)から直接情報を収集することで、深井戸や衛生トイレのニーズのあるキャンプの情報をより効率的に収集することができたと考えられるが、新規参入のためプロセスを把握しきれていなかった。



状況の把握が進むことで、効率的な動きができるようになり改善していくことができた。

- ・リソースの効率性

本事業のプロジェクトスタッフの多くは、既に難民キャンプにおいて他団体で支援した経験のある者（例えばエンジニアにおいては掘削方法だけでなく、難民キャンプエリアの帯水層に詳しいなど）も少なくなく、人材とその技術などのリソースを十分活用できたといえる。

(9) 事業実施における有効性 (Effectiveness/Timeliness)

- ・難民キャンプにおいては、当時深井戸が不足していたキャンプ19に深井戸20基、また水不足が深刻であるため掘削要請のあったキャンプ8Wで1基設置したことにより、計21基の深井戸を難民キャンプに設置することができた。また、各井戸の裨益世帯の代表者に水衛生トレーニングを、選出された清掃ボランティアに清掃トレーニングを実施し、包括的な支援を実施した。裨益者のラシダ・ベグムさん（女性27歳）からは「毎日2回、朝と夕方に井戸を利用している。飲み水として活用するほか、洗濯、調理、水浴び用にも使っており、家の近くに井戸ができたので、水を家まで運ぶのもだいぶ楽になった」との声が聞けた。

- ・衛生トイレにおいてはキャンプ19に90基、キャンプ13にも40基計画したがそのうち10基、計100基設置した。トイレ利用に関するトレーニングのトレーニング内容は、深井戸の水衛生トレーニングとほとんど同様だったため、深井戸の裨益世帯以外の世帯を対象にして、各世帯の代表に対して実施した。また、各衛生トイレのために選出されたクリーナーに清掃トレーニングを実施し、包括的な支援を実施した。裨益者のランザンさん（男性55歳）は「トイレは快適に使えている。妻がIVYの衛生研修に参加しており、石鹸を使ってきちんと手洗いするなど、そこで学んだことを家族に共有してくれ、実践している」と語るなど、実際に行動変容につながったという声もあり、有効であったと言える。

- ・一方で、ホストコミュニティの対象2村では事業開始時にも依然として水不足は深刻で、その中でも特に深刻なパラ（集落）への22基の深井戸の設置により、水へのアクセスが向上しただけではなく、各裨益世帯の代表への水衛生トレーニングと清掃ボランティアへの清掃トレーニングの実施を通して、「家族の下痢を起こす回数が減った」（アンワラ・ベグムさん、女性35歳）という意見もあり、有効であったと言える。

(10) 事業実施に際しての調整 (Coordination)

- ・難民キャンプにおける活動の全体方針についてはWASHセクターと調整し実施を進めつつ、水関連はセクター内の水技術ワーキンググループ、トイレに関しては衛生技術ワーキンググループ、トレーニング関連は衛生促進ワーキンググループの各ミーティングに参加し、調整を行なった。

- ・一方、キャンプレベルではキャンプWASHフォーカルを中心に、隔週開催されるキャンプWASHコーディネーションミーティングには必ず参加し、同じキャンプ内で活動する他団体と情報共有および調整を行なった。また、同様に隔週開催されるCiCミーティングにも参加し、他のセクターで活動をしている団体やマージ、サブマージも含めた、キャンプ全体の情報共有・調整をした。

・また、ホストコミュニティにおいてはウキヤ郡地方政府代表の承認の下、パロンカリユニオンと調整して実施を進めた。

### (1 1) 事業実施によるインパクト (Impact)

・難民キャンプでは、難民がホストコミュニティの所有する井戸に水を汲みに行くなどして、トラブルになることも少なくなかったが、本事業で深井戸を設置したことで、ホストコミュニティ住民との軋轢回避に繋がった。

・ホストコミュニティでは、これまで飲み水を汲めるところが住居から遠いことも珍しくなく、女性が水を汲みに行っている道中に男性に嫌がらせを受けることもあったが、本事業で住居から近いところに深井戸を設置できたことで、嫌がらせを受けることが少なくなったという裨益者の声があった。

・清掃ボランティアは、指名ではなく、希望者が自ら手を上げ決まるという展開になった。また、難民キャンプの住民からトイレの周囲の清掃について問題があると指摘があったが、その際に解決策についても言及があり、キャンプの状況を自らが守っていくという姿勢が見られた。

### (1 2) 人道支援の必須基準 (CHS) 及びスフィア・スタンダードへの適合性

#### 【CHSの適合性について】

基準	対応
コミットメント 4.1	実施前のアセスメントや設置後のアセスメントなど複数回の聞き取りを通して、地域社会や人々の参加と関与を確保した。
コミットメント 5.3	各コンポーネントのアセスメントでは対象の性別や年齢を予め設定し、脆弱層の要望を聞く機会を設けた。深井戸や衛生トイレのデザインに関しては、ムクティおよびエンジニアと協議をした。
コミットメント 5.4	各コンポーネントでアセスメントおよびモニタリングを実施したが、普段発言しにくい女性、子ども、障害者、高齢者に対しては、丁寧な言葉遣いをし、苦情や意見を言いやすいように配慮をした。

#### 【スフィア・スタンダードの適合性について】

基準	対応
(衛生促進基準 1.1) 「衛生促進」	<input type="checkbox"/> 深井戸の建設によって、影響を受けた人々が大腸菌群が検出されない改善された水源から水を調達できるようになった。また、衛生トイレの設置とトイレ利用に関するトレーニングにより、地域の環境に人間の排泄物がなくなるよう寄与した。
(衛生促進基準 1.2) 「衛生用品の特定、入	<input type="checkbox"/> 水衛生トレーニングおよびその後の衛生キットの追加配布を通して、必要とされている衛生用品を特定し、配布を行っ

手および使用」	た。コンポーネント1と2の難民キャンプでは、1ヶ月に1回1人あたりアクアタブ36錠を、3ヶ月に渡って配布した。また、コンポーネント3のホストコミュニティでは、1ヶ月に1回1人あたり入浴用石鹸250グラムと洗濯用石鹸200グラムを、2ヶ月に渡って配布した。
(給水基準2.1) 「アクセスと給水量」	<p>□ 本事業を通して、難民キャンプでは各家から平均12.1メートルのところに深井戸を設置し、平均4分間の待ち時間で1人1日あたり平均して26.8リットルの水を使用できるようになった。また、同じ井戸を使用する人数は平均して321人であり、いずれも同基準を満たしている。</p> <p>□ ホストコミュニティにおいても、各家から平均34メートルのところに深井戸を設置し、平均1分未満の待ち時間で1人1日あたり平均して28.7リットルの水を使用できるようになった。同じ井戸を使用する人数は平均して85人であり、いずれも同基準を満たしている。</p>
(給水基準2.2) 「水質」	□ 井戸掘削後は、住民に使用される前に掘削業者によって水のサンプルを取り、DPHE <sup>15</sup> で水質検査を実施した。いずれの井戸からも大腸菌群は検出されなかったことを確認し、住民による使用を開始した。
(し尿管理基準2) 「トイレへのアクセスと使用」	□ 各家から平均して12メートルのところに男女別で鍵付きの衛生トイレを設置した。同じトイレを使用する人数は平均して12.8人であり、同基準を満たし、女性や少女が安心してトイレを使用することが可能になった。
(し尿管理基準3.1) 「人間の排泄物のない環境」	□ 即座にし尿を格納するために、100基の浄化槽付きの衛生トイレを設置した。

## 12. 事業管理体制 (上手くいった点、いかなかった点を、理由を含め記載)

### (1) 人員配置

本事業は、現地提携団体ムクティ協力の下、IVYが実施した。

#### ・提携団体を設けた理由

現地提携団体を必要としたのは、バングラデシュ政府のNGO登録を短期で取ることが困難だったことや、事前調査の結果、現地には現地の事情をよく把握し、すでにキャンプでの事業経験もあり、コンプライアンスの点でもパートナーを組める能力と経験を備えたナショナルNGOが複数あることがわかったため、提携した方が事業を安全で失敗が少なく行うことができ、裨益者

<sup>15</sup> 公衆衛生工学局 (Department of Public Health Engineering)

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

にとっても利益になると考えた。

・うまくいった点

事業開始当初の2か月間は、弊団体がFD6やFD7に関するルールや現地スタッフの採用方法、工事業者の選定まで不明な点ばかりだったが、ムクティ事務局長やムクティ本部スタッフの辛抱強いサポートや他の日本の団体の方々にご教示を仰ぐことができた。

・うまくいかなかった点

当初、日本人が現地に1人であったため、彼をサポートするために、コーディネーターをサブも含め3人雇用したが、それぞれの役割分担が明確でなかったため、現地活動の要と言えるクトゥパロンフィールド事務所のコーディネーターに明確な指示が届いておらず、フィールドの情報も十分に上がってこないということがあった。そのため、途中でIVY現地コーディネーター、サブコーディネーターとの契約を解除し、フィールドスタッフの中で優秀なスタッフをコーディネーターに据えた結果、情報がスムーズに流れるようになった。

事務所	スタッフ配置
IVY 本部事務所（山形市） 【役割】事業全体やJPFとの調整、財務、駐在・職員の公募と採用・労務、監査を担った。	事業総括…0.27人役 事業副総括…0.3人役 事業総括補佐…0.016人役 会計担当…0.31人役
IVY バングラデシュ事務所 （コックスバザール） 【役割】現地における事業全体の調整の他、RRRCやWASHセクター、ムクティ本部との調整及び経理や広報を行なった。	現地事業統括（日本人）…0.6人役 現地事業統括補佐（日本人）…0.2人役 スーパーバイザー（日本人）…0.35人役 IVY 現地コーディネーター（現地スタッフ）…0.5人役 クリーナー…0.53人役
ムクティ本部 （コックスバザール） 【役割】NGO局（FD7と6の取得手続き）、RRRC、現地行政との調整、財務、職員の公募と採用、業者選定、配布物資調達、現地監査等を担った。	ムクティ現地代表…0.18人役 ムクティプログラムコーディネーター…0.19人役 ムクティ人事マネージャー…0.22人役 ムクティ財務マネージャー…0.18人役
クトゥパロンフィールド事務所 （フィールドの活動拠点） 【役割】	（プロジェクト）サブコーディネーター 1人…0.44人役 プロジェクト（フィールド）コーディネーター…0.79人役 事業担当会計…0.73人役 事務所庶務…0.81人役

井戸・トイレ工事、トレーニング、調査、CiCなどとの調整を行った。	エンジニア 7人 モニタリングスタッフ 3人 コミュニティファシリテーター 5人
-----------------------------------	--

## (2) 資金管理

本部には事業専用口座を開設し、会計担当者がJPF資金以外の入金・出金を行わないように管理した。現地で使用する費用については、ムクティ本部が使用している Bangladesh Krish Bank へ三井住友銀行仙台支店もしくは山形銀行寿町支店から現地の送金依頼に基づいて電子送金で対応した。現地事務所の手許保有金の限度は2,000ドルとし、やむを得ない事情により限度額を超えて保有する場合は、事務局長の承認を得た。(経理規定第23条)

出納管理は(1)現金は金庫に保管する。(2)経理責任者は月末の業務終了前に現金残高を数え、外貨残高表に記録し、事務局長に報告する。(3)2,000ドル以上の現金の引き出し、支払(銀行振込、現金、小切手、クレジットカード)を行うときは、経理責任者が事務局長の承認を得る。(4)職員への給料を除く、業者等への2,000ドル以上の支払は、合理的な理由があるときを除き、銀行振込、小切手、クレジットカードによるものとする。(経理規定第27条)

支払いの承認については、300ドル未満：現地事業統括と会計担当者の承認、300ドル以上1,000ドル未満：現地事業統括と事務局長の承認、1,000ドル以上5,000ドル未満：事務局長と理事1名以上の承認、5,000ドル以上：理事会の承認を得るものとする。(経理規定第29条)等、経理規程を順守した。

また、ムクティに係る日常の資金管理、証憑については、ムクティの財務コーディネーターの監督のもと、事業担当会計が事業地からの購入依頼書に応じて資金の出金管理、および事業支出に関する証憑管理を行なった。

## (3) 安全管理体制

事務所及び宿舎は、防犯カメラが設置されているなど警備が厳重で且つ複数の国際NGOの事務所のある建物内に置き、邦人の滞在に関しては入管及び地元警察に報告した。また、事業地に移動する際には、邦人職員だけで行わず、必ず現地コーディネーターを同乗させた。難民キャンプ内に入域する時には、事前にムクティを通して許可証(キャンプパス)を取得するようにした。

また、出張者の訪問中は、カラトリ地区にある援助関係者が滞在している Hotel White Orchid に宿泊するなど、セキュリティに配慮した。

なお、弊団体の「安全管理ガイドライン」(2016年6月3日改訂版)では、情勢の変化をレベル1(平常時)、レベル2(要警戒・活動は継続)、レベル3(要警戒・通常活動の中断あるいは行動制限)、レベル4(退避行動の開始・退避)、レベル5(退避後)、事業地への帰還に分け、情報収集から分析、判断まで組織内での役割分担を文章化し、明確化している。このガイドラインに基づいて、適切に安全対策を行った。

## 13. 想定していたリスクへの対応

想定していたリスク	対応
-----------	----

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

FD7、FD6等の政府承認手続きが遅れる	<p>・FD7申請後、10日で承認されたため、キャンプでの井戸、トイレ事業を計画通りに開始することができた。</p> <p>・FD6申請後、承認まで39日かかったが、その前にFD7が承認されていたため、効率よく事業を進めることができた。</p> <p>・ただし、FD7については、バングラデシュ政府より8月下旬に事業を止められたため、再開願いを大使館を通じてNGO局へ願い出たが、11月末日で事業を中止するよう通達が来たため、30基のトイレ建設を中止せざるを得なくなった。</p> <p>・また、本事業費として、弊団体が日本からバングラ側の銀行に送金した事業費の余剰金の返還をめぐってNGO局ともめたが、大使館の仲介により返還手続きが行われた。ただし、現時点でCOVIT-19の影響により約3カ月遅延し、弊団体の日本の口座に着金したのは7月10日のことであった。</p> <p>FD7の事業費の余剰金は当初返還できないとの情報があったが、提携団体ではなく、大使館や日本の団体が直接求めれば実際には可能であった。ただし、手間や時間がかかり、バングラデシュから日本への海外送金はリスクもあるので、以下のような善後策が考えられる。</p> <p>①送金は現地事業費の75%程度にし、何度か小分けにして送る。予算の消化見込みが立った段階で不足額を送金し、多額の残額が出ないようにする。</p> <p>②後継事業がある場合は、提携団体が変わった場合も、①の残額を新口座に振替してもらおう。実施団体は帳簿上で振替。</p> <p>③後継事業がない場合、日本の口座への返還手続きを取る。</p>
サイクロン・モンスーンの襲来で工事が遅れる	<p>・サイクロン等の襲来に備えて、スタッフとともにタイダウン（杭や柱で建築物を地面に固定する）のための準備を整えた。</p> <p>・井戸の掘削、衛生トイレ建設が乾期に行われたため、モンスーン・サイクロンの影響を受けなかった。</p>

14. 広報実績 *(JPF 事業に関する広報実績を中心に記載)*

## 【マスコミによる取材】

・2018年9月19日NHK山形、NHK東北の朝、夕方のニュースで「山形市のNPO、ロヒンギヤ支援  
 ジャパン・プラットフォーム提出用 *(フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)*

へ」というタイトルで、当事業が紹介された。現地事業統括佐藤が、動画でキャンプの現状をレポートした。また、現地提携団体のムクティ事務局長から、日本のNGOとの連携に関するコメントも紹介された。Web上でも配信され、SNSでもシェアしたことから、多くの反響があった。

・JICA広報誌mundi2019年1月号(No.64)の「わたしが見つけたSDGs」(裏表紙)で当事業の深井戸掘削が紹介された。

[https://www.jica.go.jp/publication/mundi/1901/ku57pq00002gt7dk-att/16.pdf?fbclid=IwAR0aoWxwVVjsyw1H\\_hhCMLHKTv3qxJMgrq9ykT3b6FwIqJ3x21Jdw7T04\\_E](https://www.jica.go.jp/publication/mundi/1901/ku57pq00002gt7dk-att/16.pdf?fbclid=IwAR0aoWxwVVjsyw1H_hhCMLHKTv3qxJMgrq9ykT3b6FwIqJ3x21Jdw7T04_E)

### 【イベントにおける事業紹介】

・2019年9月23日(火)に仙台で行われた「せんだい地球フェスタ」にて出店したIVYブースにて、来場者に本事業について紹介した。

・2019年9月28日(土)29日(日)にわたって開催されたグローバルフェスタにて出店したIVYブースにて、来場者に本事業について紹介した。また、同時に開催された「外務省写真展」にて本事業の活動写真が展示された。

**【団体 Facebook 関連記事】**※本事業を紹介する際、文末に本事業がJPFからの助成である旨記載。

2019年9月17日(月)はじめまして！

2019年9月20日(木)ロヒンギャ難民支援

2018年10月20日(土)活動する難民キャンプの選定を進めています

2019年1月21日(月)難民キャンプでの井戸掘りとトイレ建設が進んでいます

2019年2月14日(木)難民キャンプでの水衛生トレーニングが始まりました

2019年3月31日(日)難民キャンプでの井戸の使用が始まりました

2019年6月13日(木)ミャンマー避難民受け入れ地域への支援

2019年6月20日(木)世界難民の日

2019年7月11日(木)浄水タブレット配布と水衛生研修後のモニタリング

2019年7月28日(日)モンスーンによる被害が出始めています

2019年9月3日(月)外務省写真展フォトコンテストに応募しました！

2019年9月12日(木)ミャンマー避難民支援・公衆トイレの設置

### 【ミャンマー避難民支援の事例を使用した「難民に関するワークショップ」の開催】

・2018年11月25日(日)、「国際理解実践フォーラム2018」(IVY、山形県国際交流協会、JICA東北共催)が開催され、分科会の一つとして「難民を知るワークショップ-ミャンマー避難民編-」を行った。教員、学生、市民、マスコミ等41人が参加。朝日新聞山形版にも掲載された。

・2018年12月15日(土)、東北学院大学地域共生推進機構多文化共生・国際交流部門が主催した「難民を知るワークショップ-ミャンマー難民編-」を共催。学生および地域住民の難民問題に対する関心と認識の喚起あるいは深化を目的として開催され、25人が参加。また、その模様が河北新報に掲載された。

ジャパン・プラットフォーム提出用 (フォントはMS明朝、10.5ポイントを使用のこと。)

- ・2019年7月13日（土）仙台市において、開発教育協会主催の「教材作りセミナー」が開催され、IVYが作成したオリジナルワークショップ「難民を知るワークショップ-ミャンマー避難民編-」を実施。30人が参加。
- ・2019年11月16日（土）、東北学院大学地域共生推進機構多文化共生・国際交流部門が主催した「難民を知るワークショップⅡ-ミャンマー避難民編-」を共催。学生13人が参加。

#### 15. その他の報告事項

本事業費として、弊団体が日本からバングラ側の銀行に送金した事業費の余剰金の返還をめぐってNGO局ともめたが、日本大使館の仲介により2020年2月に返還手続きが行われた。ただし、COVID-19の影響のため銀行業務が閉鎖とのことで、弊団体の日本の口座には着金したのは7月10日であった。

以上